中等部

共学化 2 年目の教育実践

中等部部長　山縣　基

2025 年度の中等部では、共学化 2 年目として前年度に整えた学校での様々な制度や活動を継続する一方、生徒が自分たちの学校生活をよりよいものにしていくために考え、話し合う取り組みも行った。副委員長選挙の方法については、全校生徒が 3 回にわたり話し合い、一人ひとりの意思をより反映しやすい制度に変更した。また、中等部 1 年では、毎週の「懇談」の土台となる対話する力を育むプログラムを展開し、自分の思いを伝え、他者の思いを受け止める経験を重ねた。

1. はじめに

男女共学となり 2 年目を迎えた 2025 年度は、前年度に整えられた本鈴から始まる一日の生活、礼拝、昼食、労作、委員会などの活動の仕組みを基本的には継続した。その中で、生徒たちが自分たちの学校生活や自治のあり方について考え、よりよいものをつくっていく機会も生まれた。その一つが、委員会の副委員長選挙の方法をめぐる全校での話し合いであった。

また、各クラスで毎週 1 時間設けられている「懇談」の時間について、その目的や方法を改めて教職員で考える機会を持った。懇談を、生徒たちが自分たちの生活の中で生じる課題について主体的に話し合う場としていくためには、その土台となる対話する力を育む必要があると考え、中等部 1 年の担任チームで一年間を通した対話のプログラムを展開した。

2. 副委員長選挙の方法変更をめぐる全校での話し合い

中等部では、生徒委員会に委員長と副委員長が男女 1 名ずつおり、いずれも 3 年生が担っている。また、立候補制ではなく、全員が順番に候補者となる方式で選挙を行っている。2024 年度の全校会議で、委員長と副委員長を同じ候補者の中から同時に選び、両方の選挙で同じ候補者が 1 位となった場合には委員長を優先することが決まり、2025 年度はこの方法で選挙を行ってきた。

しかし、この方法には一つの課題があった。副委員長選挙で最も多くの票を得た生徒が委員長に選ばれた場合、その生徒に副委員長として投じられた票が、結果として副委員長の選出に反映されないことである。

そこで、一人ひとりの意思をより反映しやすいかたちにするために、選挙をどのような方法にするのがよいのかを全校生徒で考えることにした。話し合いの段取りや司会は、2025 年度の生徒委員会の委員長・副委員長経験者が担い、3 回に分けて中等部で話し合いを行った。

1 回目は、各クラスで新しい選挙方法について自由に案を出した。そこでは、「委員長選挙を行った後、残った候補者で副委員長選挙を行う」「得票数 1 位を委員長、2 位を副委員長とする」「副委員長選挙では第二候補まで投票する」といった案のほか、「順位に応じて点数をつける」ボルダルールという方法など、多様な案が出された。



各クラスで案を出す話し合い

2 回目の全校会議では、学年混合のグループに分かれ、それぞれの案について利点と課題を考えた。自分の学年やクラスだけで考えるのではなく、異なる学年の生徒とともに話し合うことで、それぞれの方法について様々な視点から検討することを大切にした。各グループでの話し合いで出された意見は、プレゼンテーションや掲示によって全校に共有し、その上で、さらに検討を続ける 3 つの案を投票によって選んだ。

そして 3 回目の全校会議では、残った 3 つの案につい

て改めて話し合い、最終的な投票を行った。その結果、「まず委員長選挙を行い、その後、残った候補者の中から副委員長を選ぶ」という方法が選ばれた。

この話し合いでは、1 回目には学年混合グループではなく、各クラスで話し合う方法をとった。それは段取りを担当の生徒たちが考える中で、選挙経験の少ない 1 年生は学年混合グループよりもクラスごとの方が意見を言いやすいだろうと考えたためである。一度の話し合いで結論を出すのではなく、それぞれの案の利点と課題を出し、案を絞り込み、さらに検討した上で、一つの案に決めるという過程を踏んだ。こうした話し合いのプロセスそのものについても、できるだけ多くの生徒の意見を反映させるために、生徒たちが試行錯誤した結果であった。

なお、これらの取り組みについて、段取りや司会を担当した生徒のうち希望者 6 名が、ルールメイキング関東地域児童・生徒大会において発表し、他校の児童生徒や教育関係者と意見交換を行った。

3.「懇談」の土台となる対話を学ぶプログラムの展開

中等部では週に 1 時間、各クラスに「懇談」の時間があり、生徒たちで様々なことを話し合っている。この懇談をより豊かな話し合いの場としていくためには、その土台となる対話について、生徒たちが経験を通して学ぶ必要があると考え、中等部 1 年の懇談の時間の中で、対話について学ぶ機会を設けた。

中等部 1 年生は、それぞれ異なる小学校や地域から集まり、新しい仲間と学校生活を始める。そこで、まずは互いを知り、自分自身について考え、異なる考えを持つ相手と関わることを大切にした。

まず、名前ビンゴやマルチプルインテリジェンスなどの活動を通して、自分や他者を知ることから始め、次にクラスで大切にしたいことを考え、クラスの土台を確認した。また、哲学対話ゲームや学びある旅行計画の作成など、様々なテーマで話し合う中で、対話を通して合意形成していく経験を重ねた。さらに、食事の後片付け、SNS 上でのコミュニケーションなど、その時々にクラスの中で生じている課題についても話し合う時間を持った。また、外部講師による講演や「写真 DE 対話」などを通して、対話には様々な方法があることも経験した。毎回の授業の後には、対話ノートを用いて、自分の考えや経験を振り返り、自分自身に目を向けることも行った。

1年間の実践を通して、生徒たちの中には、「話し合いたい」と自ら申し出たり、何かを話し合って決めることや、合意形成のための対話に積極的に取り組んだりする姿も見られた。

一方で、相手の話を聞き続けることの難しさや、一部の発言力のある生徒だけで話し合いが進んでしまうこと、自分自身の課題よりも他者の問題に目が向きやすいことなどの課題も明らかになった。

1 月には、1 年生での実践を受けて、今後の方向性について教職員で話し合う機会を持った。そこで確認されたのは、生徒たちの日常生活から出てきた問いや課題を話し合うことと、その時々に応じた対話のプログラムを実施することを、相互に関連づけていくことの大切さである。また、自分自身の考えや感情に気付き、自分を知ることを出発点として、他者との違いを理解し、互いの考えや思いを尊重しながら対話すること、そして、その対話を通して中等部のありたい姿を考え、学校生活を自分たちでつくることを大切にすることを、今後の方向性として確認した。

今後も、すべての人が喜び助け合う平和で持続可能な世界をつくる担い手を育むことを目指して、生徒たちが学校生活を自分たちでつくっていく経験を大切にしながら、中等部の教育内容を考え、実践していきたい。